

『重家集』考

——守覚法親王との関わりを中心に——

○はじめに

藤原重家は歌道家である六条家の家員である。父は『詞花集』撰者の藤原顕輔、母はその家女房であった。初名は光輔、後には出家して蓮寂（あるいは蓮家）と号した。顕輔の六条邸を伝領する一方、非参議正三位大宰大弐にまで昇り官途にも恵まれた。和漢兼作で管弦もよくした。和歌事跡も少なくない。仁安元年『中宮亮重家朝臣家歌合』の開催、経盛本『万葉集』の書写や二条天皇歌壇での活躍、自邸での歌会等の歌歴が知られる。父祖や兄弟の清輔、季経、顕昭に比すると地味ではあるが、官人・歌人として重要な位置を占める人物である。

その私家集である『重家集』は、岡田希雄の報告以降、後に尊経閣文庫本、慶應義塾図書館本が報告され、谷山茂、樋口芳麻呂編『未刊中古私家集 二』（古典文庫、一九六三年）、『私家集大成』、『新

梅田 径

編国歌大観』等に活字翻刻されている。古典文庫の解題では、重家の伝記を兼ねた集全体に渡る詠作年次の推定や諸本の解説があり、岡田論文と共に『重家集』研究の基礎文献である。『重家集』には二条天皇歌壇の歌会が緻密に記録されており、院政期歌壇史の重要史料であるが、『重家集』の研究は歴史史料としての評価に強く規定されてきたようにも思われる。編年体歌集という側面が重視され、書誌学的、歌壇史的な研究が盛んになされたが残された問題は少なくない。

仁和寺御室守覚法親王に献上されたと考えられており、六条家と仁和寺との関係を知る上でも重要な作品である。合点の存在や詞書の分析など、歌集内部にもまだ十分に検討されていない課題が多く残されているのである。

本稿では、まず『重家集』の詞書に付された注記を手がかりにして合点について論じ、そこから判明することをもとに、守覚と重家との関係を論じる。さらに、『重家集』の性格や『重家集』と同様

の経緯で成立した諸私家集についても触れたい。

一 「二条天皇内裏百首」の検討

『重家集』を活用した研究としては、久保田淳の網羅的な中世和歌史の研究^②、井上宗雄による六条家歌人伝の研究等があるが、特に二条天皇内裏歌壇について詳細に検討したのは松野陽一である^④。松野は『重家集』を手がかりに二条天皇内裏歌壇の動向を調査した。特に「二条天皇内裏百首」(以下内裏百首)は重要な催しであったと考えられ、中村文が同百首に参加した歌人を分析し、二条天皇による近習との和歌活動には君臣和楽を実現する政教的な要素が強く存していたと指摘する^⑤。

内裏百首は、二条天皇・重家・通能・雅重・範兼・定隆・宗家の参加が想定され、永暦二年七月二日に賜題、同四日から隔日で十首ずつ披講を行い、十九日後の七月二十二日に終篇した百首で、花・時鳥・月・雪・祝・初恋・忍恋・初逢恋・後朝恋・会不会恋の十題十首で構成された。十首を単位にした百首は「崇徳院句題百首」、「師光百首」等の先例があるが、本百首のように披講まで行うのは特殊なケースであった。正本は現存せず、諸歌集に詠が取られるがこの百首を一括で残すのは『重家集』のみである。同集には、開催の経緯について注が施されている。

／内裏百首

①永暦二年七月二日賜題、四日被始講、隔日十首披講之、十九ケ日終篇、

②此百首皆以別様、然而事為嚴重、③併可入何歟、仍別不合点、又為下品者全分可被除歟(丸番号・梅田)

「／」は底本に存する朱の右合点である。「内裏百首」の標目に細字で注記が書き込まれている。この箇所は松野陽一によって、次のように内裏百首の開催事情を述べるものと解されてきた。

「此百首皆以別様」以下の文意は難解であるが、「別様」は歌人毎もしくは歌題毎に別様に記すの意なのであろうか。「然而」以下は作品の完成度と質の高さ、並びに形式を嚴重に整える為に、歌稿の形などで各題毎に何首か余計に書いたりしておき、それに合点を付したりするようなことはせず、「下品」の歌は全部除去した、自ら秀作と認めるもののみを記さねばならぬという内容であろう。とすると「別様」は、全体として統一した書様は無く、各人毎に自由に別様に記す、ということを行っている^⑥と解せそうに思われる。

しかしながら、それぞれの歌人が各題ごとに十首以上の歌を書いた歌稿を用意し、合点も付さずに良歌のみを選んだとしても、過去の催しに「併可入何歟」、「又為下品者全分可被除歟」と疑問を提示している点不審が残る。そもそも重家自身が参加した百首に「歟」は必要であろう。特に問題となるのは「仍別不合点、又為下品者全分可被除歟」であろう。『重家集』には「内裏百首」詠は百首全てが収められており、仮に歌稿に「下品の歌」が記されていたとしても、『重家集』にはそれらを徐棄した後の正稿のみが収載された

ことになる。^⑦除棄していない歌も収載されているならばともかく、『重家集』にわざわざこのような説明を載せる理由は薄い。注記の全文を「内裏百首」の説明と読んだ松野の論では不審な箇所が残ってしまう。

私見では、注記の部分は大きく三箇所に分けられるように思われる。①が賜題から終篇までの日数を示した文であるため、②以下も百首の開催に関する記述と考えられてきたのであろう。②は「この百首は以前の百首とは別の様式（方法）で行われた。しかしながら、百首は厳密に遂行された」と解したい。「別様」は松野も述べる通り、確かに何が別様なのか判断に迷うが、少なくとも歌稿の書式とは考えにくく、ここでは披講を含む百首の形式を指したものと考えてみたい。「内裏百首」が隔日で十首ずつ披講する特殊な形式の催しでありながら、遅滞も遺漏もなく遂行されたことを「厳密」と表現したものであろう。

稿者は③以下を『重家集』に付された合点についての記述と考えたい。③以下は「しかし、（家集に）どのような歌を入集させるべきでしょうか（判断に悩みます）。したがって（百首内の歌それぞれに）合点を付けることはしませんでした、下品の歌は分けてすべて除くべきでしょうか」と解せると考えられる。ここでの合点は「内裏百首」の歌稿に付された合点ではなく、『重家集』全体に付された合点を指しているのである。

①②は事情に通じた者にしか書けないが、③は、事情を知らない

読み手に向けて書かれた「内裏百首」の説明としては難解すぎる。後述するように『重家集』の合点についての注記と考えれば、これは、「内裏百首をどのように扱うべきか」を説明する編集注記と読みうるのである。こうした編集注記は管見の範囲では他に存しないようであるが、それだけ「内裏百首」の扱いが特別であったのだろう。次の節で合点の問題と共に具体的に検証する。

二 『重家集』の合点と奥書

『重家集』には三種類の合点が付されている。未だ十分に検討されておらず、放置されてきた問題である。^⑧集内部には、右合点（／と表記する）、左合点（＼と表記する）、圈点（○と表記する）が存し、下巻のみの慶應義塾図書館本には徐棄記号と見られる鉤点があるが、これは尊経閣文庫本末尾と慶應義塾図書館本巻頭との重複歌に付されたもので無視する。内訳は以下の通りである。

／のみ	…和歌63
＼のみ	…和歌5 詞書1
○（朱）	…和歌108
○＼	…和歌177
○／	…和歌8
＜	…なし

総数で見ると次の通りである。

○総数 ……和歌293

＼総数 ……和歌182 詞書1

／総数 ……和歌71

なお、左右の合点が同時に付されることはなく、左合点は右合点をつけた後で付されているようである。圏点は半分近い歌に付され、左右の合点は贈答歌にも題詠歌にも付され、法則性を見出すことは容易ではない。

注意すべきは、一箇所だけ詞書に右合点が付されていることである。それが先に述べた九七番歌詞書の「内裏百首」である。さらに「内裏百首」の各詠には左右合点が付されない。これは詞書に合点されることで百首すべてに合点がかかることを指示するものであるう。

合点が付されない歌群としては、二二一番歌から二三八番歌までの「艶書御会」がある。この箇所には朱筆や細字で訂正が入り、国会図書館本と尊経閣文庫本で異同もある。本文上の混乱も想定されるが、特異な催しであり合点は付さなかったたのであろう。

たしかに、合点は集の成立にかかわらない後人が付すことも多く、転写の過程で移動しやすい要素である。しかし、国会図書館本にも左右合点及び圏点が付されている。重家の手によって合点が付されたものと考えてよい。左右の合点が付された経緯は奥書に示されている。岡田が奥書を三部に分けており、それに従って読んでいきたい。

保元四年以後拙什、依仰払底書進之、此以前愚詠等、不留草之間、悉以忘却、努力々々不可及外見、定招嘲哂候歟之由、能々可令申入給矣（第一奥書）

治承二年七月三日進之、此以後、草出来者可尋加也、追仰彼入道尋常歌等令合畢（第二奥書）

以仁和寺宮本書了、重家自筆歟（第三奥書）

第一奥書は「拙什」という表現から重家自身によるものである。保元四年以降の詠作を払底して家集を編んだとするが、「依仰」とある所から貴顕からの依頼によって制作されたことがわかる。第三奥書から仁和寺宮の所持本があったことが判明し、岡田はこれを根拠にして制作依頼主を守覚と認定する。

第二奥書では、治承二年七月三日に進上されたことが記される。

だが、そのあとに一度重家に差し戻されたのであろう。「此以後、草出来者可尋加也」は、第一奥書を受けて「歌集を進上して以降も、重家が残して置かなかったという保元四年以前の歌を探して加えるべきである」と読みたい。新詠を「尋加」と表現することに違和感がある。さらに、追加で「尋常の歌」等に合せしめたという。「令合畢」は「尋常の歌」を追加したという解釈も可能であろうが、守覚への進上後（治承二年七月三日以降）に和歌が追加された明徴はなく「合点を施した」の意であらう。

第二奥書の記述から、左右どちらか、あるいは両方の合点は守覚への献上後、重家に差し戻した折に追加されたものと考えてよいと

思われる。同時に「内裏百首」の注記も合点が付された際に付けられたものと考えるべきであろう。第一、第二奥書及び「内裏百首」の詞書の注記は、守覚と重家の直接の交流を示すのではなく、重家と守覚の間を取り持った人物との通信であると考えられよう。従来指摘されなかったが、第一奥書に「可令申入給」とあって、守覚と重家との間に両者に関わった人物がいたようである。

では、守覚はどのような基準で『重家集』の合点を付けさせたのであろう。この点、同じく治承二年八月に守覚に奉られた『林葉集』の奥書を検討することで類推できる。

箇内

左点 百五十八首

右点 七十五首

無点 四百卅七首

但左点は当座人^并後日伝聞人^{子息}聊有感気歌等也

右点は撰集并所^{子息}打聞等被撰入歌等也

無点は不及沙汰謬歌、但依多召所令注進也

治承式年八月廿二日

右林葉集者俊恵法師^{俊頼朝臣}歌也、此写本者將軍家^{常徳院殿}以御

本所令書写之本也、以件本書写也

『林葉集』は、築瀬一雄が伝本を整理し、久保木秀夫が古筆切及び伝本を調査して河野本、書陵部本を基準とした校本を作成している⁽⁹⁾。現存伝本はすべて後人の手が入った増補本であり、久保木によ

ると合点の総数と奥書に記される合点の数が一致する本はなく、諸本でも出入りがある。しかしながら、合点については一応俊恵が付した段階のものがあつたとみてよい。

奥書によれば、左合点は当座の人々及び後に伝聞で人々に感気があると考えられた秀歌であり、右合点は撰集に入集した歌等である。位相はやや異なるが、どちらも評価を受けた秀歌なのである。無点歌は「不及沙汰謬歌」であるという。自詠を謙遜して述べたものであろうが、このような詠作まで含むほど「多くの歌」を奉るようになりし渡されていたのである。同じ守覚からの要請によって制作された『重家集』も家集編纂にあたり『林葉集』と同じく、類似した要求を出されていた可能性は高い。この両書の奥書を付きあわせることで、私家集を製作するにあたって献上者が二人に出していた要求の内容を推測することができる。

三 守覚からの要求と献上歌集の性質

ここまでの材料から推測できる守覚側からの要求は、まず「多くの歌が載る歌集」という規模に関することである。『重家集』では集の成立以降も家集に歌を追加すべきであると命ぜられ、『林葉集』は多くの歌を載せるように求められていた。

次に「良い歌がどれであるかを示している」（あるいは秀歌撰である）ことである。これは『林葉集』が秀歌の位相を左右合点で示

していること、そして無点歌を「不及沙汰謬歌」としていることから判明する。この両集の共通項は、他の守覚への献上歌集にも当てはまる。

『重家集』や『林葉集』をはじめ、数百首からなる大規模な私家集群が治承二年ごろを収載上限として次々成立し、同じく守覚に奉られたかと考えられていることはよく知られている。⁽¹¹⁾ 現在、奥書から献上が確実な俊成『長秋詠藻』の他、教長『貧道集』、『清輔集』、実定『林下集』、『頼政集』が候補として挙げられている。千草聡は『古蹟歌書目録』第十「諸家集近代」に載る諸家集から、『資隆集』、『登蓮集』、『顕昭集』、『寂然集』、『堀河集』、『兵衛集』のいくつかは守覚の集集によるかと述べている。⁽¹²⁾ 今後の考究が待たれるが、献上が確実な『重家集』、『林葉集』、『長秋詠藻』および『貧道集』等の比較検討には守覚の集書事業の性格を考える上でも大きな意味がある。

これらの歌集は規模が似通うが、その部類・編年の別や部立構成はそれぞれに異なる。しかし、その内容を閲すると、二条天皇や崇徳院への追慕歌が多く見えることや、詠作機会を明示する傾向が強いこと等、相互に似通う歌材や詠作状況が存する点には注意すべきであろう。『出観集』のように歌題のみ記す歌集はほとんどないことも、守覚が歌集の編集に関する要求を出していた可能性をうかがわせる。

特に、これらの歌集における百首歌の扱いは『重家集』を考える

上で重要である。『貧道集』では「初度百首」、「久安百首」、「句題百首」を解体した上でそれぞれの部に配置している。⁽¹³⁾ 『長秋詠藻』は上中下の三巻の内、上を「久安百首」と保延七年頃の「述懐百首」の二つの百首歌にあてている。⁽¹⁴⁾ 百首歌の収載は、これらの歌集の中で、特に歌集規模を保つ上で大きな役割を果たしている。『重家集』の「内裏百首」における注記から考えるに百首歌の収載、特に「久安百首」や「句題百首」といった崇徳・二条天皇時代の和歌催事を多数収載するように求められた可能性も考えられよう。

また、『重家集』では二条天皇内裏御会の詠を記すにあたって「卒爾」や「片時」(八番歌のみ)「当座」など御会の性質を細かく注しており、また二二二番歌から二三八番歌までの「艶書御会」における長文の詞書や、二六七番歌の「刑部卿逆修会」において詞書が異なる「或書」があつたらしく(上欄注記)、詠作事情について比較的詳しく記す傾向がある。『貧道集』の細注や『林葉集』の丁寧な詞書など、他の歌集も詠作機会を明示する傾向は強い。秀歌の収載や規模と同様に、可能な限りの詠作機会の明示も求められたのではないかと想像される。

守覚側からの家集制作における要求は、各人で書式や様式を揃えるような性質ではなかったにせよ、その要求は各献上家集に対して一定の拘束力を持っていたと考えられるのである。

また、『重家集』で献上後に合点を付すことや、以前の詠草を追加するよう求めたように、守覚は献上後に追加で別の要求を付すこ

とがあつた。たとえば、顕昭が寿永二年に守覚に奏上した『古今集序注』では、文治二年と建久二年に、「重ねての仰せ」に依り声点を差したと奥書にある。⁽¹⁵⁾このような点からも、『重家集』が守覚への献上歌集であることに強く規定された側面を持っていることは疑い得ないように思われる。守覚及び仁和寺との関係から『重家集』を考えることは、守覚の歌書収集事業を考える上でも有意義である。次に守覚と重家との関係を考えてみたい。

四 『重家集』の謙讓表現

西村加代子が指摘する通り、治承二年ごろの守覚が歌書を収集した時期における六条家歌人と仁和寺の和歌の関わりは、重家の歌集献上の他に確認できない。⁽¹⁶⁾また、推定年次は論者で若干異なるものの、この時期では顕昭もまだ叡山に居り仁和寺には住していない可能性が高い。⁽¹⁷⁾この頃の顕昭と守覚との関わりは寿永・文治年間に各勅撰集注を進めるようになるほど深いものではなかったのであろう。ましてや守覚と重家は顕昭以上に疎遠な関係であつたと覚しい。それが『重家集』の表現にどのように反映しているのかを見てみたい。

二条院かくれさせたまひてのとし、九月十三夜月あか、りしに、左京大夫顕広のもとより

くものうへはかはりにけりとときく物をみしよに、たるよはの月かな

愚和

ありしよに月の光はかはらねとみなにかくはくもりやはせし

(重家集・二九七、二九八)

俊成からの返歌に「愚和」の表現を使用している。この表現は俊成に対して他に一例、他に「あま内侍」「頼政」「公光」に対しても使われている。返歌の書き方として「愚和」は珍しく、近い時代では慈円が「乍恐無左右進愚和」(慈円I・五一六二)と謙讓の意で使うが、時代が下る『再昌草』を除いて他に用例はほとんど見られない。『重家集』では「返し」の詞書も四九例ある。ただ「返し」とだけあるのは二九首、四四二番歌(相手は頼政。但し末句は忘却したとある)以外ほぼ重家の自詠に使われている。

次に「下官」の表現である。これは、次のように御製(二条天皇)と清輔に対し使われている。

本歌、御製

なか／＼になさけをかけぬものならはいまは思ひのたえまし物を

下官返歌

うしさらはなさけもかけしさ、かにのいとたえやすき心なりけり

(重家集・二二六、二二七)

三位大進四位正下せられたりしよろこひいひたりし返事に

大進

今日こそはくらゐのやまのみねまでにこしふたへにてのほりつ

きぬれ

返し

下官

くらゐやまみねにのほるとなにかいふなほさかゆかむすゑはと

ほきを

(重家集・四九〇、四九一)

「下官」もこの時代の歌集では他に見ない謙讓表現である。ただ、二条天皇に対しても二三七、二三八の贈答では「予返歌」とあつて厳密な使い分けはない。この時点では出家をしていないことを示す表現でもあろうか。清輔を「三位大進」と呼ぶのは、頼政や重家に限られた人物による呼称であるが⁽¹⁸⁾『重家集』に限っていえば尊称とみてよいと考えられる。

こうした謙讓表現は貴顕や兄弟に対するばかりではない。

このなけきの五十日はてし日、少納言少将になりたりしに、

刑部卿のもとより

からころもぬれしたもともかはくらしこのうれしさを袖につ、

みて

返し

老沙弥

おもひやれぬれしたもとをひきかへてこのうれしさをつ、む心を

少将か許へいひつかはし、

老沙弥

ひなつるのはねのはやしにいりぬれはとひたつばかりうれしかりけり

返し

羽林

とひゆかむすゑのはやさをおもひやはねのはやしにいれるつるのこ

(重家集・六〇四、六〇九)

この二首の「老沙弥」は出家した重家自身を指す。建春門院の没後、重家息の顕家が少将になった時の一連の贈答である。頼輔との贈答に続いて、羽林(顕家)との贈答歌に移る。沙弥は、直接的には具足戒をうけない僧侶という低い地位を示すが、謙遜の自称としても使われる。「老沙弥」の用例としては『本朝文粹』卷十三、慶保胤「養菅丞相願願文」に「某、暮年出家、一旦求道、今老沙弥、無便宮風月之養」とある。老齢になつてから仏道に出家した身を謙遜して述べ、未来ある若い子息に対して老いた自身の身を諧謔的に語る表現なのであろう。

老沙弥となつた重家が顕家に「雛鶴」とよびかけ、顕家が「とびゆかむすゑのはやさ进行やれ」と返すこの贈答は、子息の出世の祝辞に留まらず、六条家の世代交代をも示唆する。末尾が清輔の供養を目的とした一品経供養で終わる『重家集』は、一族との贈答も含めてしばしば六条家への配慮がみられる。それは父祖詠に対する配慮が見えることから裏付けられる。

人々右近馬場へほと、きすき、におはしたりしに

ほと、きすあかぬあまりにいにしへのふりにしあとをたつねて
そきく

祖父三品匠作於此所伴好客、翫時鳥、故有此詠

(重家集・三五七)

右近馬場で詠んだ歌に対する左注である。この詠作では顕季の先例が明示されている。次の歌を意識したのであろう。

右近のむまはに、人人、ほと、きすたつぬとて

ほと、きす声あかなく山彦のこたふるさとそうれしかりける

(六条修理大夫集・七二)

右近馬場で女房と贈答歌を交わす状況は『伊勢物語』九九段を踏まえている。馬場のひをりの日に「中将なりける男」が車中の女に和歌を送る著名な段であるが、実際に右近馬場では和歌の催しや連歌や贈答が行われていた。『詞花集』には以下のような長実の贈答歌が見える。

修理大夫顕季みまさかのかみに侍りける時、人人いざなひ

て右近のむまばにまかりて郭公まち侍りけるに、俊子内親

王の女房二車まうできて連歌し歌よみなどしてあけほのに

かへり侍りけるに、かの女房のくるまより

みまさかやくめのさらやまとおもへどもわかのうらとぞいふべ

かりける

このかへしせよといひ侍りければよめる 贈左大臣

和歌のうらといふにてしりぬかぜふかばなみのたちことおもふ

なるべし

(詞花集・雜上・二八三・二八四)

顕季や長実の詠作が常に踏まえられたわけではないが、右近馬場で「時鳥」を詠ずる歌人は少なくない。季経(季経集・四八)や祐盛(新勅撰・夏・一七七)も右近馬場で時鳥を詠んだことが知られる。

『重家集』で顕季詠を本歌であると記したのは、献上先に重家自身が六条家の家員であることを強調し、六条家の歌道家としての正当性を訴求する効果を期待したからではないだろうか。そう見れば、末尾が清輔の菩提を弔う一品経供養で集を終えているのも示唆的である。『重家集』は、重家と六条家との強い関係を訴える歌集なのである。編年体という父祖と同じ形式を採用していること自体、重家が六条家の歌員であることの表明であると言える。

こうした『重家集』の記述の様態から浮かび上がるのは、献上先と重家との〈距離の遠さ〉である。伝記的にも重家には仁和寺への訪問や御室との交流が確認できず、恐らく直接的な交流はほとんどなかったものと考えられる。だからこそ、極端に自らを謙譲し、子息や一族、交流ある歌人(俊成など)を称揚する表現が多用されたものと考えたい。ほとんど関係がない仁和寺から重家に歌集の献上が求められたのは不思議な事ではある。守覚と重家との間を取り持った、あるいは、俊恵、俊成、重家、教長と交流をもち守覚の歌集収集事業をコーディネートした仁和寺側の人物がいたのかもしれない。

ない。その上で、重家は一族、特に子息たちの立身や顕昭・清輔らに対する配慮がはつきりとうかがえるように家集を制作したのである。一族への称揚と謙讓表現の多用による献上者との関係は『重家集』の中に内発的な動機だけでは説明できない複雑な要素を持ち込んでいる。「内裏百首」における注記もその一つなのである。百首中の「下品」の歌を除くべきかと伺いを立てている点に献上者と直接やりとりをしていないような遠慮がちな姿勢が見て取れるのではないか。

五 おわりに

以上、『重家集』「内裏百首」の注記を切り口に、歌集内部の問題を探ってきた。重家の手元にあった歌稿を利用したような編年体の歌集であつても、その詞書の書き方には、献上先や六条家の一族に対する種々の配慮がうかがえる。編集の意識が働いているのである。『重家集』は守覚の歌書収書事業の要求が織り込まれた歌集なのである。こうした点からも、『重家集』は守覚の歌書収書事業を見直す手がかりとなるだろう。

近年、守覚の聖教・儀軌類の著述、集書等についての研究が積み重ねられて¹⁹⁾いる。だが、治承二年夏以降の歌書収集活動は、撰集などへの発展が見られず、その目的も含め今後究明されるべき課題は多い。だが、こうした中で『重家集』が献上された意義は改めて問

い直されるべきであろうし、守覚の歌書収集事業により献上された他の諸私家集との比較検討も有効であろう。

無論、単純な比較検討には問題がないわけではない。『貧道集』はじめ献上されたと思しき諸家集は安元年間までになっていたものが基盤となっていたとされ、『長秋詠藻』も出家以前に制作された部分が大半であつたとされる。²⁰⁾守覚の求めに応じて作られた歌集と、守覚が求める以前から制作されていたものが奏上された場合とで、守覚側の要求も異なっていた可能性もあろう。全て今後の課題としたい。だが、まずは諸私家集の一つ一つの論理と構成から、献上歌集としての性質や献上先との関係性を読み解きうることを認識すべきなのである。

重家に私家集編纂の内発的な強い動機があつたとは思われず、また保元四年以降の詠を編年で集成するという歌集の形式からもそれは伺えない。他出も極めて限定的で、ほとんど流布しなかつたようである。重家自身が仁和寺に献上する以外、積極的に他者に見せなかつたからであらう。だからこそ、『重家集』は守覚の要求に対して比較的忠実かつ最適な形を採用した歌集——外発的な要因を強く受けた歌集——である可能性が高く、その点からは非常に重要な歌集であると評価するべきなのである。

また、仮に本論で指摘したように重家と守覚を取り次いだ人物がいたとして、それが誰であるかといった問題も残る。多くの課題は残るが、『重家集』には謙遜表現や、説明的な詞書が多く、一族に

対し様々な配慮が見え特定の読者を強く意識した記述が散見される。献上先である守覚との関係が浅いことからこのような書き方を選択したと考えられ、そのような観点をふまえつつ、歌集内部の問題や特質へと目を向けるべき段階に來ている。

注

- (1) 岡田希雄「藤原重家集解説(上)」(『芸文』一八一、京都文学会、一九二七・二)、同「藤原重家集解説(下)」(『芸文』一八一、京都文学会、一九二七・二)。以下、岡田論文はこの二本による。なお、岡田希雄旧蔵本は国会図書館現蔵である。
- (2) 久保田淳『中世和歌史の研究』(明治書院、一九九三)。
- (3) 井上宗雄『平安後期歌人伝の研究 増補版』(笠間書院、一九八七)。重家の伝記的事項も本書に依った。
- (4) 松野陽一『藤原俊成の研究』(笠間書院、一九七三)。
- (5) 中村文『後白河院時代歌人伝の研究』(笠間書院、二〇〇五)。
- (6) 松野注(4)前掲書、六四二頁。
- (7) ただし、尊経閣文庫本では「月十首」題が八首しかなく朱で「雖十首有本八首不審」と注される。一二二、一二四番歌が片仮名で補入されており、尊経閣文庫本の祖本にはこの二首が抜けていたものであるが、重家が二首抜いたのであれば後から片仮名で追加するとは考えにくく、後人による校合と考えておきたい。
- (8) 谷山、樋口前掲書、『重家集』解題(「付記」重家集中、歌頭の小圈および左右の肩の合点は何を意味するかについては、さらに慎重に考えねばならない。とくに肩の合点の方は、奥書中に「追仰彼入道尋常歌等令合畢」とあることと照応するものであるかもしれないが、なお後考を俟つことにしたい。)五七頁。岡田前掲論文にも合点圈点について指摘がある。

- (9) 築瀬一雄『築瀬一雄著作集1 俊恵研究』(加藤中道館、一九七七)。
- (10) 久保木秀夫『林葉和歌集 研究と校本』(笠間書院、二〇〇七)。
- (11) 『私家集大成』内、「林下集」「教長集」等の解題。また、守覚からの要請で制作された歌集群の認定に関しては松野陽一『鳥帯 千載集時代和歌の研究』(風間書房、一九九五)に詳しい。
- (12) 千草聡「守覚法親王略年譜―和歌活動の面を中心に―」(『筑波大学平家部会論集』三、一九九二・三)。
- (13) 黒田彰子『俊成論のために』(和泉書院、二〇三三)。
- (14) 松野注(11)前掲書、檜垣孝「俊成における『長秋詠藻』編纂の意識について―百首歌の取り扱いを中心に―」(『山形県立米沢女子短期大学紀要』一三、一九七八・一二)等では俊成の内発的な動機や「久安百首」「述懐百首」への思い入れが重視されるが、守覚からの要請と俊成の歌集の編纂意識が関係するのは十分に明らかにされていない。俊成は生涯十三度(以上)の百首歌を詠んだが家集に二つの百首をそのまま挿入している点は特筆に値しよう。
- (15) 顕昭『古今集序注』「寿永二年極月中旬 顕昭注之/文治二年正月廿四日依重仰差声加點畢/建久二年九月五日重下賜加點差声了。顕昭」(『日本歌学大系 別巻四』による。『』は改行。同様に重て点を加えたことは『古今集注』他にも見える。年次は未詳だが、『散木集注』にも「重下給差声了」とある。
- (16) 西村加代子『平安後期歌学の研究』(和泉書院、一九九七)によれば、顕季が仁和寺最勝院を建立し、その縁で寛顕、長寛、印性といった六条家ゆかりの人物が仁和寺に入山している。長寛は顕輔息で長実の猶子となった(『仁和寺候人系図』)人物だが、承安二年には房舎を印性に譲り仁和寺を離れたとみられる。『千載集』にも入集し歌歴もある。顕昭以外にも六条家関係者の歌僧がいたことは注意されよう。
- (17) 久曾伸昇「顕昭・寂蓮」(三省堂、一九四二)、西沢誠人「顕昭攷―仁和寺入寺をめぐる―」(『和歌文学研究』二八、一九七二・六)。顕昭の仁

和寺住山は、久曾神は寿永元年頃、西沢は元暦年間まで下ると考える。

- (18) 兼築信行「三位大進考―藤原清輔の称をめぐる―」(『国文学研究』一五五、早稲田大学国文学会、二〇〇八・六)。

- (19) 阿部泰郎他編『守覚法親王と仁和寺御流の文献学的研究 論文篇』(勉誠出版、一九九八)、同『守覚法親王と仁和寺御流の文献学的研究 資料編』(勉誠出版、二〇〇〇)等。また、現在の仁和寺には『古蹟歌書目録』にみえる歌書群は現存しない。山本真吾「守覚法親王関係典籍」(研究代表者月本雅幸『平成9～12年度科学研究費補助金基盤研究(A)(1)研究成果報告書 真言宗寺院所蔵の典籍文書の総合的調査研究―仁和寺御経蔵を対象として―』二〇〇一・三)。

- (20) 松野注(4)前掲書。

付記

『重家集』本文、私撰集は『新編私家集大成』(『和歌&俳句ライブラリー ver4』日本文学ウェブ図書館、二〇一四)により歌番号を付した。勅撰集は『新編国歌大観』(『和歌&俳句ライブラリー ver4』、日本文学ウェブ図書館、二〇一四)によった。『本朝文粹』は新日本古典文学大系によった。引用に際して私に表記を変更したものがある。